



KULS ニュースレター No. 56

INDEX

- 平成26年度司法試験の合格発表によせて
- 平成26年度司法試験合格者 合格体験記
- 合格者の横顔

●平成26年度 司法試験合格発表によせて●

鹿児島大学法科大学院は、平成26年度の司法試験で4名の合格者に恵まれました。

まず、なにより合格された方に、心からお祝いを伝えたいと思います。今後、法曹界はもちろん、日本社会全体としてこれまでにない複雑化・多様化が進行し、みなさんが活躍する場面が一層増えるものと思います。ますますの研鑽と発展を期待します。

また、残念ながら今回は結果を得られなかったみなさん、捲土重来を期し、来年度に向けて悔いのない取り組みを。我々もできる限りの支援をします。要望などがあれば、遠隔地におられる方も、遠慮なくお伝え下さい。

なお残念ながら、今回をもって進路変更をするみなさん。みなさんが努力し身につけられてきたことに自信を持ち、堂々と新たな道に進んでいただきたいと思います。微力ながら、お役に立つこともあるかもしれません。身近に思う先生や事務担当者でかまわないので、気軽に連絡をいただければと思います。

今年度の結果については、過去最高の合格率となり、法科大学院別順位でこれまでにない上位に位置したことなどから、多くのみなさまからお祝いのお言葉をいただきました。これまで、たくさんの方々に期待していただき、また、支えられていたことを改めて実感しています。ここに、心からお礼申し上げます。

鹿児島大学法科大学院は、募集停止をしたとはいえ、まだ学生が在籍し、受験資格を有し来年に向けて真摯な努力を重ねている修了生がいます。私たちは、最後の学生が受験資格を失うまで一人ひとりを大切に、「地域に学び、地域に貢献する」法曹の養成に取り組めます。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

鹿児島大学法科大学院
研究科長 米田 憲市

● 平成26年度 司法試験合格者 合格体験記 ●

渡邊 賢さん（4期生）

第一 大学院在学中

1 1年次(平成19年度)

1年次は、ひたすら判例を読みました。

私は、大学まで理系であり、純粋完全未修といわれる類型でした。当然、入学当初は、授業の内容もほとんど理解ができません。特に、「説」＝仮説と認識しておりましたので、非常に困惑しました。

そこで、「動かないもの」を、学習の中心に据えることにしました。すなわち、確定した公文書である「判例」および条文を読むことにしました。法律実務の「相場」をつかむことを主眼としました。

2 2年次(平成20年度)

2年次は、文章を書くことに集中しました。

小規模の答案練習会を、多数回実施しました。テーマ(旧司法試験の過去問)は事前に開示され、予備校作成の「それらしい」答案を暗記し、どこまで再現できるかを競いました。

果たして、効果があったか疑問ですが、手書きの習慣は身についたように思います。

その他にも、様々な目的・態様のゼミを実施しました。

3 3年次(平成21年度)

3年次は、予備校の答案練習用の問題を繰り返し解きました。時間配分を体得することを目的としました。また、旧司法試験を受験しました。この受験で、受験可能回数は1回減りました。家庭の事情で、私は5年3回の受験を全うできない見通しでした。そのため、短答式の訓練の一環として、受験しました。

第二 留年・就職・卒業(平成22～23年度)

私は、3年次の後期の単位を1つ落としてしまい、留年しました。そこで、大学院に在学したまま、国家公務員Ⅱ種試験を受験することにしました。合格し、平成22年10月から法務省で勤務を開始しました。その後、平成23年3月、大学院を卒業しました。

フルタイムでの勤務をしつつの学習は、困難を極めました。就職前は、10時間以上学習していたところ、就職後は、半分になりました。これでは、網羅的な知識の習得・受験技術の向上は望むべくもありません。

そこで、私は、単純な戦略で乗り切ることになりました。すなわち、「試行錯誤」です。具体的には、「演習」と銘

打った書籍を、片っ端から解く、というものです。体系などは一切意識せず、個別の問いの解法を覚えるようにしました。

第三 受験1回目(平成24年度)

一回目の受験は、平成24年でした。結果は、短答式270点、論文式362点、総合得点769点で、不合格でした。出題者の意図するところはある程度つかめていたので、敗因は日本語の表現力の不足である、と仮定しました。対策として、古典文学を読みました。伝統的な日本語を会得することを目的としました。特に、志賀直哉は、繰り返し読みました。

第四 受験2回目(平成25～26年度)

2回目の受験は、平成26年でした。結果は、短答式279点、論文式477点、総合得点975点で、合格でした。

2回目の受験に際しては、食べ物に気を配りました。胃腸に負担をかけないように、ゼリーやおかゆなど、消化しやすいものを食べました。この措置は、確かに胃腸には負担がかからないのですが、食事をした気になりませんでしたので、心理的に辛いものがありました。

第五 総評

司法試験合格に必要な能力は、忍耐力であると考えます。受験の準備中も、試験本番も、とにかく耐えることが求められます。

受験戦略も重要です。長期間の準備が必要となりますので、自分の置かれている状況、利用できる資源などを十分に考慮したうえで、計画を立てることが肝要です。

田上 公洋さん（6期生）

1 試験直後及び合格発表時の心境

私は今回の司法試験(3回目)に合格することができました。記述枚数は平均して4～5枚でした。試験直後の感触は過去2回のもとはそれ程変わりませんでしたので、今回も合格するかは半信半疑でした。合格を確認したときの喜びはそれ程なく、むしろ安堵感の方が強かったです。

2 学修方法について

論述対策では、過去問の起案指導を受けたことが役立ちました。また、受験新報の「紙上添削教室」、法学教室の「演習」を読み、事案とその解答との関連性を身につけることができ、事案検討におけるひらめき・瞬発力を養うことができました。A4の用紙を500枚購入して答案作成等に使用(両面コピー)し、約1年間でほぼ無くなりました。

択一対策としては、ロー・ライブラリー(TKC)上の過去問にも取り組みました。

余談として、前述した受験雑誌の特集・連載で興味があるものは読みました。お勧めの一つとして、「対話で学ぶ刑法判例」(法学教室No.317連載開始、合計18回)があります。

3 私の経験からこれから受験される皆様にお伝えしたいこと

(1) 司法試験に合格することは思ったほど困難ではない。

採点基準が公表されない以上、合格ラインは不透明ですが、だからといって合格ラインを高めを設定することは悪影響に繋がる可能性が高いと考えられます(裁判官・検察官志望の方には違う考え方もあると思いますが)。「合格できる」とまでいかなくとも、「合格できるかもしれない」ぐらいの自信・気概を持つことが司法試験合格には必要だと思います。そのためには、それを根拠付けるための努力は必要です。

(2) 積極的に質問・相談を。

個別学習が中心となるため、誤解したまま理解していると致命傷になります。その誤解に気付く手段・方法は試験・答練等で間違えるか、質問・相談での応答の場ではないです。後輩は先輩のために質問をし、先輩は自己チェックのために対応することをお勧めします。

(3) 「当たり前」のことを書く。

学修が進んでいくと、基本的な事が「当たり前」と思うようになり答案上に記載しない事態に陥ることがあります。司法試験は、その「当たり前」をきちんと把握しているかを判断するための試験でもありますので、「当たり前」を記載しないと「知らない。理解していない。」と判断され、その結果他の受験生と差がついてしまいます。これほどもったいないことはありませんので、注意してください。

(4) 最後に

①基本的な知識を身につけ、問題文中の事実に対応して法的知識を適切に用い規範・判断基準を定め、事実を評価して結論を出す。②設問において求められていることに直接答える。③答案上の基本的なルールに則って答案を作成する。以上の点を注意して司法試験に挑めば、きっと合格圏内に入ることができると思います。

以上、勝手ながら意見を述べました。あくまでも個人的見解ですので、誤り等がありましたらご指摘ください。「言うは易く行うは難し」ですが、皆様のこれからのご奮闘及び司法試験合格を実現されることを期待しております。質問等がありましたら気軽に声をかけてください。非力ではありますが、できる限り対応致します。

9月17日に開催された「合格者報告会」



山元 平介さん（6期生）

(1) 「押してダメなら引いてみる」。小学生でも知っている恋愛テクニックではないでしょうか。この言葉を文字にする日が来るとは夢にも思っていませんでした。

私は、今回3度目の受験で合格することができました。その中で、1度目、2度目の受験と今回の受験の大きな違いは、「法律の勉強」をやめ「試験勉強」に重きを置いたという点にあるのではないかと感じています。

(2) まず1度目の受験は、論文があと10数点あれば合格という結果に終わりました。1度目の受験対策は、しっかりと知識を整理し、研究者等によって書かれた問題集を解いて発展的論点までカバーしておくというものでした。そのため、このままの勉強を続ければ順調に点も伸びるだろうと考え、私はとくに勉強方法を変更せず、2度目の受験を迎えました。

しかし、結果はというと、択一は点数が伸びたものの、論文は点数が下がり、総合成績も下がっていました。択一の成績からすると知識は増やすことは出来たのだと思います。一方、論文については、散々です。

(3) 知識が増えたことにより抽象論に偏ってしまった、細かな論文ばかりに目が行き論点の比重が悪くなってしまったといった原因により点数が下がったのではないかと当時分析しました。また、書きたいことが多く論点や配分の取捨選択ができていない、その結果最後まで書き切れていないという問題もありました。一方で、ある程度論点自体には気づくこともできていた上に、法的三段論法という論述方法もできていなかったわけではないと分析できました。

そのため、3度目の試験では、2時間で6枚(書ける限界です)という枠内で如何に点数を稼ぐかといった点、すなわち「試験勉強」を重視しました。司法試験も資格試験であり、平等な採点をするための基準が存在するはずだと自分に言い聞かせ、少し割り切るようにしました。具体的には、自分の2年分の点数や合格者の答案を踏まえ、過去問と出題の趣旨をしつこく比較しました。強く意識したのは、「どうしてこの論点、事実気づかなかったか、無駄なことを書いたか」という趣旨という結果から見た分析ではなく、「この問題文をどう読めば書くべき内容と重なるか」という結果に至るプロセスの分析です。実際に受験した過去2年分を中心に、問題一つあたり一週間ほどかけて分析したと思います。

一方で、「法律の勉強」という点については、択一の点数や気づいた論点、合格者の答案との比較といったことから、十分に足りていると判断し、判例百選と判例六法を読む程度に抑えました。

(4) もっとも、今回「試験勉強」という点を重視したことが結果的に合格につながったと思いますが、それは昨年までの「法律の勉強」があってこそそのものだと思います。正確な法的知識を身につけ、発展的論点まで踏み込むという押しも必要ですが、資格試験と割り切って少し引いてみることも必要なのではないのでしょうか。

● 合格者の横顔 ●

				
氏名	渡邊 賢 さん	田上 公洋 さん	山元 平介 さん	島田 俊一 さん
出身大学 学部・学科 職歴	九州大学理学部生物学科 法務省福岡保護観察所(H22年10月～H26年9月)	琉球大学法文学部法政学科法律コース 某プレハブ建設会社に約11年間、主に営業職として勤務の後、本校に入学	鹿児島大学法文学部法政学科 *卒業後すぐに入学したので経歴はありません。	東京大学法学部第1類
法曹を目指した きっかけ	大学の部活動中に生じた法律的問題に直面した際、自分で法律的問題を処理できるようになりたいと思いました。	漠然と弁護士になることを夢見て法律学を学ぼうと琉球大学に入学しましたが、そこで合格率など現実の厳しさを知り、司法試験の勉強を行うことはありませんでした。就職後、様々な経験から現代社会を生きて行くには「資格」を持つことが重要だと考えました。どの資格取得を目指すか検討する中で昔の夢が再燃するとともに、人生を賭けるなら最も難しい試験に挑戦しようと思い、司法試験に挑戦することを決意しました。	きっかけは特にありません。法曹という職種があることを知ったときに、やりたい仕事はこれだと感じた直感のままに目指しました。	小学校のころの公民で児島惟謙に感動したから
受験中、一番 辛かったこと	就職後、学習の時間が慢性的に不足していたこと。徐々に記憶が薄れていく恐怖を味わいました。	一回目の不合格から今回の合格までの約2年間です。不合格の悔しさ・虚しさ、その他おおよそ言葉では表現できないような感情を2度経験しました。この感情等は経験者にしか理解できません。この感情等を胸に抱きながら過ごした学修生活はとてもつらいものでした。	自由な時間があまり取れないこと	受験期間が長くなってしまったこと
息抜きの方法	漫画を読むこと、アニメをみること。一時期、「魔法少女まどかマギカ」は、毎日見てました。	私は、学修は大学内の自習室等で行い家では行わない(現実的に不可能)方針でした。なので、家でTVを見る等ゆっくりすることが息抜きになりました。また、どうしても学修の意欲が湧かないときは、きっぱりと諦めて帰宅したり昼寝をする等していました。	音楽鑑賞、飲みに行くこと	鹿大で開かれる公開講座への参加や、裁判傍聴
得意科目	行政法・環境法	ありません。好きな科目は民法・民事訴訟法です。	刑法	好きなのは労働法、得意科目も不得意科目も特にない。

この体験記が、来年受験される方々の一助になれば幸いです。

島田 俊一 さん（9期生）

おかげさまで平成26年司法試験に合格することができました。私が今回の試験で合格できた理由は、①レベルの高い鹿大の教授陣、実務家教員による緊張感のある少人数授業②大学が提供する学修支援の積極的活用③自主ゼミの仲間との存在④過去問中心の勉強にあると思います。

はっきりいって鹿大の教授陣のレベルは高いといえます。1年生はなんといっても授業が大切です。鹿大ならではの緊張感のある授業にくらいついていてください。1年時の基本書を中心とした勉強が最終合格に最も重要となります。

2年時以降は実務家教員の授業も始まります。鹿大の授業をしてくださる実務家教員のすごさには驚愕します。尊敬に値するといってもいい。実務家ならではの一言一句を大切に聴き、自分のものにするよう努力してく

ださい。合格に直結はしませんが、個人的には、徳之島での無料法律相談がもっとも刺激を受けた授業でした。弁護士の素晴らしさを肌で体験できる貴重な機会だと思います。

2年の後期からは、合格者による起案ゼミ、弁護士の先生主催のゼミを上級生に交じって受けさせていただきました。チューター指導や鹿大の教授陣への質問は常に飛び込みでした。オフィスアワーとかは無視してください。

3年時からは学修支援のなかでも最優先すべき過去問の起案指導が始まります。論文過去問の勉強においては、出題の趣旨、採点実感の読み込みが大切です。読み込みにあたっては「何を書くべきか」と「どのように書くべきか」を分けて読むようにするとよいと思います。

3年後期からは授業が一段落します。私は2年生の刑事系の即日起案や刑訴の苦手部分(伝聞)の授業に参加させていただきました。そのおかげで伝聞の苦手意識はなくなりました。

私は学校では集中して勉強できなかったのですが、家で勉強していました。しかし、家でずっと独学していると、

行き詰まってしまいます。そこで、気の置けない仲間と自主ゼミを組みました。その仲間からの質問が大変役にたちました。質問に答えるには深い理解が必要です。質問に答えることで知識の再確認にもつながりました。

短答、論文ともに過去問、条文、基本書、百選で必要十分だと思います。論文の勉強で、余裕があれば、「刑法事例演習教材」(有斐閣)等の多くの受験生が使っている問題集を解くのもいいと思います。短答の模試は受ける必要はありません。しかし、試験直前の予備校の公開模試は、最低1回は受けることをお勧めします。本試験の時間的シミュレーションにはなります。

最後に、私は、鹿児島大学法科大学院で勉強できたおかげで合格できたと思っています。感謝申し上げます。鹿大は本当に素晴らしい。募集停止は大変残念ですが、奇跡的に募集が再開されるくらい、来年以降も合格者を輩出しましょう。そのための協力は惜しみません。起案ゼミもすでに立ち上げました。たくさんの学生が参加してくれ、最終合格することを祈念します。

